

掘りday はちのへ

—八戸市埋蔵文化財ニュース第 19 号—



墨書土器が出土した竪穴住居跡のカマド（平安時代）。

「方人」と記された墨書土器 ～^{たものき}田面木遺跡～

田面木遺跡で出土した「^{ぼくしょどき}墨書土器」は、平安時代とみられる竪穴住居跡のカマドから 4 点が集中して見つかりました。そのすべてに「方人」と記され、筆跡はどれもよく似ていて達筆です。よその土地から訪れた人か、この集落に暮らしていた人かはわかりませんが、同一人物によって記されたと推測されます。

「方人」が示す意味は不明ですが、カマドから集中して出土したことから、当時の人びとがカマドにまつわる祭祀^{さいし}やおまじないに使った可能性も考えられます。（次頁につづく）



「方人」銘墨書土器（高台付坏）



飛鳥・奈良・平安時代の大集落～田面木遺跡～

田面木遺跡は馬淵川下流域右岸の丘陵上に所在します。今回発掘調査を行った地点は、現在の八戸工業高等専門学校と田面木小学校の間に位置し、北東方向にある馬淵川に向かって下る緩斜面地です。調査原因は、長芋・ごぼう作付けに伴うもので、平成27年度は2,000㎡を調査しています。

平成27年度の調査では、飛鳥時代の^{たてあなじゅう}竪穴住居跡1棟、奈良時代の竪穴住居跡3棟、平安時代の竪穴住居跡12棟・^{たてあないこう}竪穴遺構18棟、土坑8基、^{ろあと}炉跡2基がみつかりました。ここでは竪穴状の遺構の中でも、カマドをもつものを竪穴住居跡、もたないものを竪穴遺構として分類しています。

時代ごとの竪穴住居跡の数から、この集落が飛鳥時代にできはじめ、奈良時代にかけて徐々に数を増やし、平安時代には飛躍的に多くなっていることがわかります。

また、飛鳥・奈良時代まではカマドをもつ竪穴住居跡が大半を占めますが、平安時代にはカマドをもたない竪穴遺構が多くつくられます。これらは住居ではなく、何らかの作業をする工房的な空間と考えることもできます。集落の人口が増加した平安時代に、人びとの生活や生業に変化があったのかもしれません。

遺物は、土師器、^{はじき}須恵器、^{すえき}土製品（^{どせいひん}紡錘車・^{ぼうすいしゃ}、^{ふいご}鞆の羽口・^{はぐち}勾玉）、^{せきせいひん}石製品（^{とishi}砥石・^{まがたま}勾玉・^{くだたま}管玉）、^{てつせい}鉄製品（^{とうす}刀子・^{すきくわさき}鋤鍬先・^{かま}鎌・^{てがま}手鎌・^{てつぞく}鉄鑊・^{しやく}錫杖状鉄製品・^{じょうじょう}鉄滓）などが出土しています。

特に注目される遺物として、飛鳥時代では石製勾玉と管玉、奈良時代では土製勾玉、平安時代には「墨書土器」があります。

石製の勾玉・管玉は、八戸では、格の高い人物への副葬品として、国指定史跡丹後平古墳群から出土しているのが有名です。この集落では最も規模の大きい竪穴住居跡から出土しており、ここに住んだ人が他の人びとに対して優越を示す^{いしんざい}威信財のような役割があったのかもしれません。

土製の勾玉は、竪穴住居跡から多くの土器とともに複数みつっています。奈良時代の人びとが住居を廃棄する際に行った、祭祀に使用した可能性が考えられます。

これまで数多くの調査を行っている田面木遺跡の中でも、「方人」墨書土器や石製勾玉・管玉は、今回の調査で初めてみつかりました。飛鳥・奈良・平安時代と営まれる田面木遺跡の様相を研究する上で、貴重な資料となりました。（苧坪 祐樹）



まがたま
勾玉



くだたま
管玉

飛鳥時代の竪穴住居跡から出土した石製勾玉・管玉
左から、石製勾玉（2.9cm）、石製管玉（2.1cm）



奈良時代の遺構から出土した土製勾玉
左上（3.7cm）、中上（2.4cm）右上（2.0cm）
左下（2.4cm）、右下（2.8cm）

縄文時代の大集落～^{しけち}重地遺跡～

重地遺跡は、八戸市庁から南東に 3.5km ほどの新井田地区に所在しています。新井田川を西に臨む、標高 20 ～ 42m ほどの丘陵上に立地し、縄文時代の集落遺跡として知られています。

平成 13 年度に行われた発掘調査で、竪穴住居跡 35 棟・土坑 309 基など多数の遺構が検出され、縄文時代前期から後期まで約 4,000 年間の長期にわたり利用された遺跡であることがわかっています。

平成 27 年度に長芋・ごぼうの作付けに伴い、約 900 m²を発掘調査しました。その結果、竪穴住居跡 11 棟、土坑 35 基を検出し、縄文土器や石器が多数出土しました。

竪穴住居跡は、円形や方形など様々な形があり、大きさは約 2.2m ～ 8m 以上までと幅があります。また、最大で 7 棟の竪穴住居跡が重なりあっており、同じ場所を選んで繰り返し住居を構築していたようです。出土した土器の特徴から、これらの竪穴住居跡は縄文時代前期後半のものであると考えられます。

土坑は円形ないし楕円形で、最大規模のものは直径約 2.6m、深さ約 1.5m です。口が底よりも狭い、理科の実験で使う三角フラスコ

に形が似ていることから、フラスコ状土坑と呼ばれ、このタイプの土坑が多く検出されています。いくつかの土坑では、壊れが少ない土器がまとまって出土しました。

土坑などでまとまって出土する土器は、同じ時期に使われていたセットと考えられるので、土器の時間的・地域的な変化を研究する上でとても役に立ちます。今回出土した土器は、全て円筒土器^{えんとう}と呼ばれるタイプで、細長い筒状の形からその名がつけられました。円筒土器の中でも比較的古いタイプのものがほとんどで、縄文時代前期後半に位置付けられます。

石器は石鏃^{せきぞく}、石匙^{いしさじ}、尖頭器^{せんとうき}、石斧^{せきふ}などが出土したほか、クリやドングリといった堅果類などの植物を加工する道具だったと考えられる磨石^{すりいし}や敲石^{たたきいし}、半円状扁平打製石器^{はんえんじょうへんぺいだ せいせつき}が多く出土しています。

平成 13 年度の調査地点が長期間利用されていたのに対して、今回の調査地点でみつかった遺構・遺物は縄文時代前期後半の比較的短い期間に限定されます。同時期の集落の様子がわかる調査事例となりました。

(西村 広経)



土坑内から出土する縄文土器

第 333 号土坑では、円筒土器が横倒しでつぶれたような状態で出土した。



円筒土器

第 333 号土坑で出土した土器。

同じ時期に使われた土器のセット。最大高 (42.0cm)

外堀の構築方法解明～八戸城跡～

八戸城跡は、八戸市内丸に所在する江戸時代の城跡を中心とする遺跡で、本丸（現在の三八城神社・三八城公園・八戸市公会堂）と二の丸（八戸市庁・南部会館・^{おがみ}竈神社等）から構成されています。寛永6年（1629）、盛岡藩の代官所として築城されたと伝えられ、^{かんえい}寛文4年（1664）に八戸藩が成立した際に、藩主の居城・藩庁と定められました。

その後、明治4年（1871）の^{はいはん ち けん}廃藩置県によって廃城となり、取り壊されるまで、八戸藩二万石の居城として使用されました。

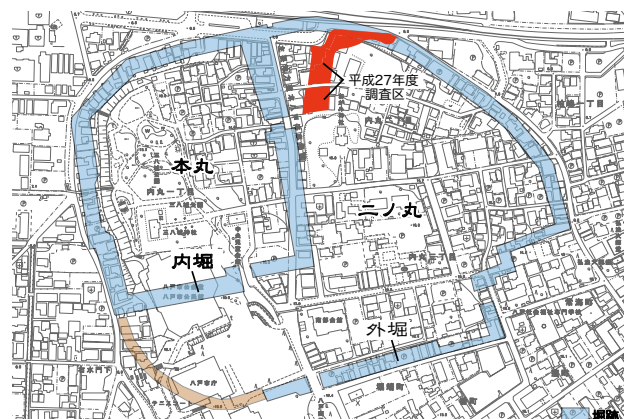
平成27年度は、二ノ丸北側にあたる約3,300㎡の範囲を6月18日から10月31日まで調査を実施しました。

遺構は、外堀からしがらみ状遺構、^{さくれつ}柵列4条、柱穴、平場から^{そ せき}竪穴住居跡（古代）7棟、土坑40基（古代24基、近世16基）、溝跡5条、おとし穴（縄文）36基、^{ほったてばしら}礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、^{へいあと}堀跡2条、性格不明遺構6基等が検出されました。

遺物は、陶磁器、土師器、木製品、杭131本、銭貨、キセル、鉄製品等が出土しました。

今回の調査では、八戸城の外堀跡の深さや構築方法を確認することができました。堀底を検出したことにより、現地表面から深さ4.5m、二ノ丸の屋敷地からの高低差が14～15mに及ぶことが分かりました。また、堀の表面に粘土を貼って保護する工法は、今回の調査区で初めて確認されました。石垣を持たない土造りの^{じょうかく}城郭である八戸城がどのようにつくられ、維持されていたかが分かる貴重な成果です。

また、堀跡からは江戸時代の陶磁器とともに、ものさし・下駄・漆塗の木製品・杭・柱材といった木製遺物が出土しています。陶磁器は、17世紀中葉～後葉のもので、八戸藩が成立した時期にあたり、外堀がつくられた時期をさぐる大きな手がかりとなりました。（村木 淳）



堀と調査区



外堀の様子

左側が粘土を貼った表面。



土留め用の杭列（しがらみ状遺構）

縦方向に打ち込んだ杭の間を、横方向から小枝を組ませてつくる。

平安時代の拠点集落～^{やわた}八幡遺跡～

八幡遺跡は、八戸市の中心部から南西へ約5.5km、馬淵川右岸の東から西に向かって傾斜する、標高6～20mの低位段丘上に立地します。遺跡範囲の現況は、大半を明治小学校の敷地が占め、そのほかの場所は宅地・墓地となっています。これまでの調査により、縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世の各時代の遺構・遺物が多数検出される、長期にわたって利用された遺跡であることがわかっています。

平成27年度の調査は900㎡という狭い範囲の中から、縄文時代の土坑墓1基・土坑6基、時期不明の土坑21基、奈良・平安時代の竪穴住居跡13棟、平安時代以降とみられる竪穴建物跡1棟、溝1条、ピットなど多数の遺構を検出しました。竪穴住居跡のうち最も多いのは平安時代のもので、奈良時代の住居跡の一部を壊し、

新しい住居がつけられていることがわかりました。さらに、調査区の中央を南北に走る幅約1m、長さ34m以上の溝跡が平安時代の竪穴住居跡を壊してつくられています。溝跡は調査区外に延びることがわかっています。（横山 寛剛）



調査区の全景（上空から撮影）

調査原因は館公民館の建て替えによるもので、調査区＝旧公民館の敷地。900㎡の中から多数の遺構が見つかった。

平成27年度是川遺跡出土品保存修理事業

平成23年度に重要文化財に追加指定された是川中居遺跡の出土品について、欠損した部分の補修や脆い部分の補強を毎年行っています。平成27年度は縄文土器1点、掘り棒2点、樹皮製容器残欠3点、漆塗り弓2点、木製品1点を修理し、保存用の台座を作成しました。（横山 寛剛）

樹皮製容器残欠



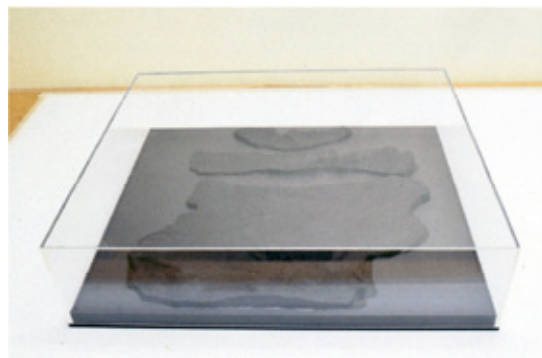
①修理前の状態



②修理中の状態（欠損部に樹脂を充填）



③修理後の状態（樹脂充填箇所を彩色）



④資料を安置するための台座



特別展「漆と縄文人」

開催期間 7月25日(土)～9月6日(月)

開館から5年目の是川縄文館では、春季企画展「掘り day はちのへ」のほか、以下の特別展・企画展を開催しました。

特別展「漆と縄文人」は、是川遺跡に代表される縄文時代の漆文化を取り上げ、縄文人と漆との関わりについて紹介しました。東日本と北陸地方を中心に各地で発掘された漆塗りの優品を展示し、最新の自然科学分析による成果を紹介しました。特別展のプレイベントとして縄文時代の漆工芸技術についての考古学講座を開催したほか、特別展では見所を解説するギャラリートークと特別展考古学講座を開催しました。

(小久保 拓也)



鉢形土器(彩文)

土器の表面に赤色と黒色系の漆で曲線文様が描かれている。
縄文時代前期 福井県鳥浜貝塚出土
福井県立若狭歴史博物館蔵 高さ 8.8cm
重要文化財



櫛のつくり

櫛は、縄文時代早期の終わりからみられ、その多くは櫛の歯を束ねて漆で固めて作られています。最新の分析により、糸まではっきりと確認され、縛り方もわかりました。



籃胎漆器

ササなどを編み組みしたカゴに漆を塗った容器です。
縄文時代晩期 石川県中屋サワ遺跡出土
金沢市教育委員会蔵 高さ 8.4cm
重要文化財

秋季企画展「小川原湖周辺の縄文文化」

開催期間 10月10日(土)～11月23日(月)

小川原湖周辺に広がる湖沼地帯で展開した、個性豊かな縄文文化を出土品とともに展示紹介しました。小川原湖周辺からは、旧石器時代の遺物が出土しており、続く縄文時代草創期から晩期まで各時代を通じて遺跡が発見されていることから、人びとは湖沼地帯の豊かな資源を上手に利用して生活していたことがわかります。また、小川原湖周辺には30箇所以上もの貝塚が発見されており、出土する貝類や骨から、以前は大きな内湾であり、今から約4,000年前の縄文時代後期には海水がひき、太平洋側の砂丘にせき止められて、現在の湖の形になったと考えられます。

(小久保 拓也)



深鉢形土器

東北地方最大級の貝塚と考えられる二ツ森貝塚からみつかった土器。突起の一つに顔がつくられています。
縄文時代中期 七戸町二ツ森貝塚出土
高さ 30.3cm



鼻曲がり土面

曲がった鼻がつけられた土製の仮面です。
東北地方の太平洋側で5遺跡からみつかっています。
縄文時代晩期 六ヶ所村上尾駱(1)遺跡出土
長さ 14cm



粘土で縄文の手形・足形をつくろう

六ヶ所村大石平(1)遺跡や上尾駱(1)遺跡からは手形や足形付きの土製品がみつかっています。企画展イベントとして、幼児を対象に手形・足形づくりを開催しました。

平成 27 年度八戸市遺跡調査報告会

平成 27 年 11 月 14 日に、八戸市内の遺跡発掘調査の主な成果を発表する遺跡調査報告会を開催しました。今回は、市内外から約 70 名の参加がありました。報告会では、縄文時代前期の重地遺跡（新井田地区）、飛鳥～平安時代の田面木遺跡（田面木地区）、縄文時代～古代～近世にまたがる八幡遺跡（館地区）、古代・近世の八戸城跡（三八城地区）の調査成果の報告を行いました。

遺物展示会場では、重地遺跡の円筒土器や石器、田面木遺跡の土師器や鉄製品、八幡遺跡の灰釉陶器・ウシの骨、八戸城跡の外堀から出土した木製品を展示しました。

平成 19 年度から 27 年度までの遺跡調査報告会の資料は、是川縄文館のホームページに掲載していますので、是非ご覧ください。

（苧坪 祐樹）



遺物展示会場のようす

是川遺跡の研究者たち ⑤^{やまのうち す が お}山内清男

山内は、縄文土器が出土する地層の層位学的研究、土器の形・文様等からの型式学的研究を応用し、日本全国の土器編年網を作り上げた人です。

彼は、明治 35 年、東京に生まれ、大正 11 年、東京帝国大学理学部を卒業し、大正 13 年に東北帝国大学医学部副手となっています。大正 15 年 4 月には、以前紹介した^{は せ べ こ と ん ど}長谷部言人とともに中居貝塚（現一王寺（1）遺跡）の発掘調査を担当し、中居貝塚から出土した土器に^{えんとう}長谷部言人が初めて「円筒土器」という名前を付けました。山内は円筒土器を詳しく研究し、上下の地層から出土する円筒土器に大きな違いがあることをつきとめ、上から出土する土器を円筒上層式（縄文時代中期）、下から出土する土器を円筒下層式（縄文時代前期）としました。さらに文様等の違いから上層式を a・b の 2 分類、下層式を a～d の 4 分類に細分しています。この方法と成果は現在でも、円筒

土器の編年の基礎となっています。

大正 14 年には岩手県陸前気仙郡赤崎村（現大船渡市）^{おおほら}大洞貝塚の調査を行い、ここから出土した土器を基に縄文時代晩期の時期細分を行っていますが、中居遺跡から出土した土器も参考にして分類を行っています。

また、昭和 11 年には是川遺跡を舞台に繰り広げた「ミネルヴァ論争」がありました。これは、雑誌ミネルヴァ誌上で^{き た さだきち}喜田貞吉（東北帝国大学）が、堀田遺跡の^{けいとくがんぼう}竪穴住居跡から縄文土器とともに宋銭（景德元宝）が出土したことに注目し、他の縄文遺跡からも古銭が出土していたため、東北地方北部では縄文時代の生活が中世まで続いていたと主張したのに対し、山内は縄文時代の終末は地域間でそれほど違いがないと否定し、考古学史上に残る大論争となったものです。この論争は、山内による型式学と層位学に基づく土器編年研究の一つの端緒となりました。（村木 淳）



平成 27 年度 八戸市内発掘調査一覧

	遺跡名	調査	調査原因	調査期間	調査面積(㎡)	主な時代
市内遺跡発掘調査事業	史跡根城跡	試掘調査	道路舗装工事及び水みち整備	H27.4.21・4.24	19	縄文・飛鳥・奈良・平安・中世
	八戸城跡	試掘調査	個人住宅建築	H27.4.27～5.1	62.4	縄文・弥生・古墳・近世・近代
	前川目遺跡	試掘調査	個人住宅増築	H27.5.2	7.5	縄文
	寺の上遺跡	試掘調査	太陽光発電設備	H27.5.12・5.13	30	縄文
	沢ノ上遺跡第 1 地点	試掘調査	太陽光発電設備	H27.5.14～5.18	64.7	弥生・奈良・平安
	天狗沢遺跡	試掘調査	個人住宅建築	H27.5.29～6.1	4.58	縄文・平安
	上野遺跡	試掘調査	個人住宅建築	H27.6.16	20	縄文・平安・中世・近世
	雷遺跡①	試掘調査	個人住宅建築	H27.6.16・6.17	24	縄文・平安
	古玄中寺遺跡	試掘調査	個人住宅建築	H27.6.23	10.25	縄文
	館平遺跡①	試掘調査	個人住宅建築	H27.6.25	42	縄文・平安・中世
	八戸城跡	試掘調査	駐車場整備工事	H27.6.26～7.1	45.9	縄文・弥生・古墳・近世・近代
	市子林遺跡①	試掘調査	個人住宅建築	H27.7.8	24	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
	前堀(1)遺跡	試掘調査	太陽光発電設備	H27.7.29・7.30	140	縄文・平安
	雷遺跡第 2 地点	工事立会	擁壁設置工事	H27.7.31・8.3	60	縄文・平安
	熊野堂遺跡	試掘調査	個人住宅建築	H27.8.17	3	縄文・奈良・平安
	沢目遺跡第 1 地点	試掘調査	太陽光発電設備	H27.8.19・8.20	111.5	散布地・縄文
	市子林遺跡②	試掘調査	個人住宅建築	H27.8.21	14	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
	櫛引遺跡	試掘調査	個人住宅建築	H27.8.24	24	縄文・奈良・平安・中世・近世
	上ノ沢遺跡	試掘調査	児童福祉施設建築	H27.8.26	68	縄文・奈良・平安
	石手洗遺跡	試掘調査	範囲確認調査	H27.8.27～8.31	51.5	縄文
	松長根遺跡	試掘調査	個人住宅建築	H27.9.15	4	縄文
	中居遺跡 R 区	試掘調査	範囲確認調査	H27.9.17・9.25	8	縄文
	松ヶ崎遺跡	試掘調査	太陽光発電設備	H27.10.16・10.20	120	縄文・奈良・平安
	駒ヶ沢遺跡第 2 地点	試掘調査	個人住宅建築	H27.10.16	38	縄文
	雷遺跡②	試掘調査	個人住宅建築	H27.10.19	8	縄文・平安
	新田遺跡	試掘調査	太陽光発電設備	H27.10.21～10.30	800	縄文・奈良
	市子林遺跡③	試掘調査	個人住宅建築	H27.10.29	8	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
	館平遺跡②	試掘調査	道路舗装工事	H27.11.2	60	縄文・平安・中世
	市子林遺跡第 21 地点	試掘調査	共同住宅建築	H27.11.4～6・11～13	225	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
	土橋遺跡①	試掘調査	太陽光発電設備	H27.11.18・11.19	46.5	縄文
	土橋遺跡②	試掘調査	太陽光発電設備	H27.12.10	65.75	縄文
	咽平遺跡	試掘調査	個人住宅建築	H27.12.16	8	縄文・奈良・平安
	雷遺跡③	試掘調査	集合住宅建築	H28.3.2～3.5	141.76	縄文・平安
	熊島遺跡	試掘調査	神社建築	H28.3.8～3.11	52.5	縄文・弥生
	細越遺跡	試掘調査	個人住宅建築	H28.3.23～3.27	18	奈良・平安
	市子林遺跡第 20 地点	本調査	個人住宅建築	H27.4.27～5.1	26.5	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
	八戸城跡第 34 地点	本調査	個人住宅建築	H27.5.18～6.9	280	縄文・弥生・古墳・近世・近代
	重地遺跡第 6 地点	本調査	長芋・牛蒡作付	H27.5.12～6.30	900	縄文
	田面木遺跡第 47 地点	本調査	長芋・牛蒡作付	H27.7.1～10.30	2,000	縄文・弥生・奈良・平安
	林ノ前遺跡	本調査	自然崩壊	H27.9.1～10.30	357	縄文・平安・中世・近世
	駒ヶ沢遺跡第 2 地点	本調査	個人住宅建築	H27.10.16・10.28	38.75	縄文
	根城跡岡前館第 63 地点	確認調査	個人住宅建築	H27.4.23・4.24	60	縄文・飛鳥・奈良・平安・中世
	根城跡岡前館第 64 地点	確認調査	駐車場整備及び擁壁設置	H27.8.6・8.20	63.63	縄文・飛鳥・奈良・平安・中世
受託事業	八幡遺跡第 7 地点	本調査	公民館建替	H27.4.13～6.30	930	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世
	八戸城跡	本調査	県道沼館三日町線整備	H27.6.17～10.31	3,300	縄文・弥生・古墳・近世・近代
	新井田古館遺跡第 30 地点	本調査	太陽光発電設備	H27.7.13～8.17	238	縄文・奈良・平安・中世・近世
	継久保遺跡	本調査	下水道	H27.11.24～11.27	24	縄文
	田面木遺跡第 48 地点	本調査	道路舗装工事	H27.11.17～12.11	300	縄文・弥生・奈良・平安

《調査事務局》(平成 27 年度)

八戸市教育委員会

教 育 長 伊 藤 博 章

教 育 部 長 佐 藤 浩 志

教育部次長兼教育総務課長

野 田 祐 子

是川縄文館長 古 館 光 治

副 館 長 清 川 定 吉

《埋蔵文化財グループ》

埋蔵文化財 GL 村 木 淳

主査兼学芸員兼社会教育課主査兼学芸員

杉 山 陽 亮

主査兼学芸員 船 場 昌 子

主事兼学芸員 横 山 寛 剛

主事兼学芸員 田 中 美 穂

主事兼学芸員 苧 坪 祐 樹

主事兼学芸員 西 村 広 経

《縄文の里整備推進グループ》

縄文の里整備推進 GL 宇 部 則 保

副 参 事 大 野 亨

主 幹 山 野 下 貴 信

主査兼学芸員 小 久 保 拓 也

主 事 熊 野 聡 美

主事兼学芸員 市 川 健 夫

主 事 馬 場 彩 香

非 常 勤 主 事 三 浦 賢 子

非 常 勤 主 事 武 山 美 郷

非 常 勤 主 事 菅 澤 早 希 子



《平成 27 年度刊行》

八戸市埋蔵文化財調査報告書

第 152 集 八戸市内遺跡 33

第 153 集 熊野堂遺跡第 2 地点

第 154 集 新井田古館遺跡第 30 地点

掘り day はちのへ 第 19 号

発行年月日 2016 年 6 月 15 日

編集・発行 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

〒 031 - 0023

青森県八戸市大字是川字横山 1

TEL 0178 (38) 9511

E - m a i l jomon@city.hachinohe.aomori.jp

http://www.korekawa-jomon.jp

(是川縄文館ホームページ)

印 刷 大東印刷株式会社

印刷部数：1,000 部 印刷経費：一部あたり 97.2 円

